

ポンドイア村のあの子を助けたい!

主体的にかかわる子どもたちへと変革を促す異文化理解教材の開発



松山市立新玉小学校
教諭 藤原一弘

主体的にかかわる子どもたちへと変革を促す異文化理解教材の開発

松山市立新玉小学校 教諭 藤原一弘

1 国際理解教育が抱える問題

国連人口基金が発表した「世界人口白書2010」によれば、今年の世界全体の人口が69億人を突破したという。特に開発途上地域、後発開発途上国の人口増加率は急激で、2050年には91億人に膨れ上がると予想されている。人口増加が単純に人類の発展に繋がっている状況はもはや遠い過去の話であり、人口の爆発的な増加による環境悪化、地球への影響は深刻な状況に陥っている。人間以外への影響はもちろんのこと、人類だけに目をむけても食糧問題や貧困、格差問題、各地で絶えることがない紛争などかつて人類が目指したであろう平和で幸福で、共存できる地球は夢物語の中でしか語られないほど悲惨な状況にあることを忘れてはならない。

しかしながら、幸か不幸か先進国の一員としてめまぐるしい経済発展を遂げ、世界的に見ても稀有に平和を維持している日本に住む子どもたちは、その現状をどれほど理解できているだろうか。今この瞬間にも多くの尊い命が失われている時でも、ゲームや携帯電話でのやりとりに明け暮れ、バーチャルな世界で平然と相手を傷つけ笑っている。毎日の食に困ることも飢えることもなく、大量生産、大量消費、大量廃棄の世界に飲み込まれ当たり前のようになっている。加えて他者に「思い」をやる、相手のことを考えた行動ができず、自分の感情を押しつけて、暴力をふるい、陰湿ないじめが後を絶たないなど、自分の周りにさえ（自分自身さえというほうが適切かもしれない）優しく接することができないという問題を抱えている。

このような状況の中、学校における国際理解教育が果たす役割は極めて大きいものがある。世界の現状を知り、自分自身の生き方、考え方を見つめ直すことは、次世代を担う子どもたちにとって必要な活動だと考えるからである。しかし、現在一般的に行われている国際理解教育はその実現には程遠いと言わざるを得ない。一部の先進的な実践を除き、一般的な小学校で行われている国際理解教育と言えば、留学生を招いてその学生の出身国のことを教えてもらい、日本のことを紹介する活動、国際支援組織で活躍した日本人をゲストティーチャーに招き、そ

の活動を教えてもらい、自分たちにもできることはないかを考えて募金や支援物資を集め、赤十字社やユニセフなど世界的に認知された支援団体へ託す活動、姉妹校や姉妹都市などを介して、先進国との交流を行う活動などが大半を占める。

それらの活動全てを否定するものではないが、本当にこれで「国際理解」と呼べるのかという点に関しては疑問符を付けざるを得ない。日本と同じ立場の先進国と交流することだけでは、世界の現状を理解することは難しい。留学生は貧困に喘ぐ現地の生の声を吸収できているとは限らない（留学できるということは、それだけその国でも富裕層である可能性が高い。）。募金や支援物資を送ること自体は有益だが、どの学校の実践を見ても、自分たちが送ったものがどこでどのように活かされ、誰の手に渡っているのかまで確認している活動はない。そこには物が有り余っている日本の奢りを考えさせていないという致命的な欠陥が生じることになる（送ったことで自己満足している、本当に役に立つものを送っているのかがはっきりしない。）。

これまで私は、ごく一般的な公立小学校で国際理解教育を実践していく中で、上記のような悩みを抱えていた。これは私だけではなく、他の多くの教員も同じであろう。しかしながら、一教員にできることは限られている。どうにかして真の国際理解教育を行える手立てはないか考える中、とあるきっかけで出会った、自分たちの地域で地道な国際支援活動、地域貢献活動を行うNPO法人との協同で組み立てる学習活動が始まったのである。

2 現状を打開する手立て

本実践は平成19年度から本校6年生の総合的な学習の時間の単元として始まり、4年目を迎えている。現在私は5年生の担任をしており、6年生の実践に直接的には関わっていない。これまで先進的に行われてきた優れた実践は有能で、能動的な教員に支えられ、「〇〇先生がやっているからできる実践」となり、大体がその教員が他の現場へ移り、実践をやめると途端にその活動自体無くなってしまう。

しかし本校では現在他の教員が手掛けながら継続的に実践が行われ、交流が進められている。一教員の宝としてではなく、学校の宝として長く実践が続けられ

るためには、適切で柔軟な対応ができるカリキュラムをしっかりと組み立てておくことと、学校に継続的に関わってもらえるNPO（本校で協力してもらっているNPOはNGOにも指定されている。）にカリキュラム作りに携わってもらうことである。教員から離れたところに軸足を置くことで、息の長い学習が行えるようになる。

本校で4年目を迎えた実践は、世界でも最貧国に挙げられるモザンビーク共和国への支援、交流活動を通じた途上国・異文化理解教育である。活動当初は「モザンビークって国の名前？」という知識しかなかった子どもたちが、活動の終盤には、「モザンビークのために何とかしたい！」「ボンドイア小学校のあの子を助けたい！」という1人間対1人間の心の通った支援、交流が行えるようになる。しかも、継続的に行われていることで、本校では「6年生になったら、モザンビークのことを勉強するんだ。」ということが子どもたちの中に定着している。加えて地域の人々にも広く認知され、支えられる活動になりつつある。

このような恵まれた環境を可能にしているのが、前述しているNPO法人の存在である。本校の学習活動に協力をお願いしているNPO法人「えひめグローバルネットワーク」(<http://www.egn.or.jp/>)は、現地モザンビークに現地事務所をもち、松山市から譲り受けた放置自転車を贈り、その代わりに現地に内戦時代から残された銃などの武器と交換する「銃を鋤へプロジェクト」活動を中心に、支援地域の発展を支え、精力的に活動を行っている団体である。代表のY. T氏は、ESD-J（「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議、<http://www.esd-j.org/>）の理事も務めており、モザンビーク共和国だけでなく、

世界の現状を子どもたちに伝える適切な人材であることは間違いない。それだけに留まらず、えひめグローバルネットワークが行う活動は、松山市が抱える放置自転車の問題の解決の糸口にもつながる。

さらに地域の河川の定期清掃を市民とともに行うなど、まさに団体のモットーである **Think**



Globally! Act Locally! Change Personally!（地球規模で考え、地域で行動し、自ら変わっていくこと）を地で行く、信頼のおけるパートナーである。「世界の真の現状を理解し、自分自身や自分の周りを見つめ直し、行動を起こせるようになってほしい。」という願いに合致した存在である。打診してすぐに本校の学習カリキュラムの協同作成と年間を通しての協力を快諾していただいております、この4年間で実に様々な学びを子どもたちに提供できている。平成21年度からは、行政である松山市国際文化振興課の協力も得て、本校の実践を中心にして、松山市に根ざした国際理解教育のモデルカリキュラム作りを行うことになっており、学校、地域、NPO、行政が一体となった学習の仕組み作りが始まるまでに成長している。

3 実践事例

本実践には、主体的な活動のヒントになる素材がたくさん詰まっている。まだ4年目の活動で、試行錯誤の時も多いのは事実だが、可能性も大きく秘めている。数多く行った実践の中から、いくつか紹介する。

(1) ハンガーバンケット

子どもたちにいきなりモザンビークの現状を話しても、遠い異国の出来事、つまり他人事にしか感じられず、「かわいそう。」という一見理解しているかのような、実は差別的な感覚しか芽生えない。途上国の現状をできるだけ自分事に引き



つけて考えさせなければならない。かといって子どもたちをモザンビークへ連れていくわけにもいかない。そこで取り入れたのが、擬似体験を基に世界の現状を考えさせるワークショップ「ハンガーバンケット」である。世界中で活用されているワークショップであるが、本校でもとても有用な教材として用いられている。

6年生の子どもたちを、世界の現状と同じ割合中をさらに数人のグループに分け、活動を行う。全体の1割にも満たない人数の先進国のグループには、お菓子や食べ物、ゲームなど溢れるほど

の物の中で自由に過ごさせる。一方、全体の8割を占める途上国のグループにはバケツに水を汲み、運動場を何周も歩かせて、児童労働や水汲みの現状を疑似体験させたり、泥水の入ったペットボトルを1つだけ渡し、どのように使うか話し合わせたりする。途上国グループからは「これで



は暮らせない。」「飲料にするには少なすぎるし、病気になってしまう。」などの声が聞こえるようになる。しばらく時間を取った後、お互いのグループの状況を見合わせ、その不合理さを感じさせるとともに、これが世界の現状であることを伝える。このワークショップを行うことにより、子どもたちは日本が置かれている恵まれた状況に感謝しつつも、世界の現状に強い関心をもつようになる。こうして、世界には多くの問題を抱えた国がたくさんあることを、自分事のように考えることができるようになる。

平成22年度の実践では、本校がESD日米教員交流プログラムのアメリカ側の教員の訪問校になったこともあり、本校6年生と米国教員16名が、このワークショップを行い、お互いの考えを話し合うという貴重な活動を行うことができた。

(2) モザンビークの子どもたちとの交流

毎日学校にも行けず、何キロもの道を歩いて水汲みに行く子どもたち、学校にも行けず児童労働を強要される子どもたち、たとえ学校に行っても十分な学習用具もなく、設備も整っていない状況でそれでも必死に学ぶ子どもたち……。モザンビーク共和国の現状や学校の様子を、竹内氏や現地スタッフの報告で知る子どもたち。過去の出来事ではなく、今ここにある危機的状況をライブで伝えてもらうことにより、本校の6年生にリアルな現実として、モザンビークが浮かび上がってくる。普通ならそこで、すぐ「支援を。」となるところだが、それでは本当にモザンビークのことを理解して行っている活動にはならない。えひめグローバルネットワークが長年支援している村の一つ、ポンドイアにある唯一の学校、



ボンドイア小学校へビデオレターを送ったり、日本のことや自分たちを紹介した絵が入った手紙を送ったりする活動を先に取り入れた。モザンビークの現地スタッフに、日本語から英語、英語からモザンビークの公用語であるポルトガル語に訳してもらった手紙や歌やメッセージの入った

ビデオレターをボンドイア小学校に持って行ってもらい、その様子を返事の手紙と共に持ち帰ってもらう。時間はかかるが、そうした交流活動を繰り返し行うことにより、今まで存在すら知らなかったモザンビークという国のボンドイア村の子どもたちが、自分の友達になる。地球の裏側から届くメッセージや手紙には、日本では考えられない、満面の笑顔に満ちあふれた子どもたちの様子、そして絵に表されているのは家畜や動物、そして残された武器……。 「こんなにも日本とは違うのか。」 「モザンビークに無いものは日本にはたくさんあるけれど、日本の人たちが無くしてしまったものがモザンビークにはあります。それは、笑顔です。あんなに苦しい状況でもあんな素敵な笑顔が溢れているなんて……。幸せってなんだろう。平和って何だろう。」 手紙や写真、映像を通じた交流を通して本校の一人の女子児童が書いた感想である。このように今現実に生きることに必死で、それでも逞しく生きている途上国の、同じ年齢の子どもたちとの出会いは、他のどんなものよりも、子どもたちの心を突き動かす。

「あの子たちの生活を楽にしたい。」 「学校に行けるように何かできることをしたい。」 「武器や地雷、病気や空腹で苦しまないように手助けがしたい。」 そこには「かわいそう」という他人事の慈善ではなく、自分たちの生活と



重ね合わせながら、自分事として考え始める子どもたちの姿がある。「世界中の困っている人のために」という抽象的な支援でなく、「モザンビークのボンディア村のあの子に」という具体的かつ血の通った支援ができるようになる。

現在4年目を迎えているモザンビーク小学校との交流であるが、現地の事情やスタッフの渡航日程、支援物資輸送の都合など、万事うまくいくわけではない。しかしながら、それだけ現実は厳しいということを知る良いきっかけになっている。また、送られた支援物資が確実にボンディア小学校に届けられ、現地の子どもたちが嬉しそうに使用している写真や映像を持ち帰ってもらっている。「あの服は僕がおくった物だ!」「あの鍵盤ハーモニカは、私が使っていたものよ。」自分たちが集めて送った物が、きちんと役に立っていることを確認できる活動まで取り入れることができるのは子どもたちにとって、「もっとやりたい。」と次への意欲をもたせるだけでなく、「やればできる」という自尊感情を高めることにもつながる。これも継続的に支援を行い、現地からも絶大な信頼を受けているえひめグローバルネットワークと協同して学習を構築しているからである。そういった意味でも教師だけで学習を組み立てていくことではできない、ダイナミックで、グローバルで、単発のイベントに終わらせない、息の長い真の国際理解、途上国理解ができていると考える。

(3) 放置自転車を通して見る松山とモザンビーク

自分たちが住む松山市の課題は、街中に広がる放置自転車の問題だ。人が多く集まる場所である、駅や商店街などに近い道路は、無造作に置かれた放置自転車によって、人が一人やっと通れるほどしか空いていないところもある。もちろん、



点字ブロックの上にも当たり前のように置かれている。市など行政でも対応しているが追いつかない状況だ。

えひめグローバルネットワークは、松山市の放置自転車を譲り受けて、モザンビークへ送り、持っている武器と交換することで、現地の平和構築と交通手段の整備に力を入れて支援して

いる。この支援事業にも子どもたちに参加させ、自分たちの住みよい町づくりを目指しながら、途上国の人たちに平和をもたらすことにつながりや意義深さを感じさせ、考えさせるようにしている。

最初に地域のフィールドを調査したり、松山市の職員の方に放置自転車の実態を聞いたり、放置自転車の保管場所に見学に行くなどして、自分たちの住む松山市に大きな課題があることに気付かせる。子どもたちは市から数十台の放置自転車を譲り受けて学校に戻り、モザンビークの人たちに送るため、きれいに磨き、メッセージを書く作業を行う。「平和が訪れますように。」「幸せに暮らしてね。」この自転車を送ることで、現地の子どもたちが何十キロも離れた学校に通うことができる、毎日何キロも歩いて行っていた水くみが楽に行える・・・子どもたちは、実際の顔を思い浮かべながら、一生懸命時間も忘れて自転車を磨く姿がある。松山市では、やっかいものの放置自転車がモザンビークでは貴重な移動手段に変わる現実。自分たちの生き方がどれほど物に溢れ、大切に使おうとしていないことに気付かされる瞬間だ。モザンビークと向き合うことを通して、実は自分たちの生活を見直す視点をもたらしている。

(4) 大使がやって来た・・・大統領も！！

子どもたちとモザンビークとの真剣な交流。お仕着せではない、「友達」をより良い生活へ導き、自分たちの生活を見つめ直させてもらっている交流。この実



態が政府レベルの心を揺り動かしている。

これまでに、駐日モザンビーク・アントニオ大使夫妻（当時）が来校し、支援や交流の謝辞を述べられている。また、駐モザンビーク・三木大使（当時）も来校され、同様のセレモニーを行っている。その他にも国連の職員やモザンビークのマカモ投資

官など、数えればきりが無いほどモザンビーク関係のゲストティーチャーが来校されている。それぞれ、モザンビークの現状やこの単元、活動をしていることの意義を強調され、子どもたちにとっては次への大きな意欲付け、刺激になっている。



さらに、平成20年5月、愛媛県に初めて来県した国家元首となったゲブザ・モザンビーク

大統領は、来校こそされなかったものの、視察の道中で本校の子どもたちが歌う「平和の鐘」を聞き、子どもたちの取組について話された。地方の1公立小学校が単独でできることは小さい。しかし、NPOだけの活動でもここまで大きくはならなかっただろう。NPOと学校がタッグを組み、息の長い交流や支援を続けているからこそ、起こった事実であろう。単発の交流や支援では絶対になし得ない、本物の交流が根付きつつある。



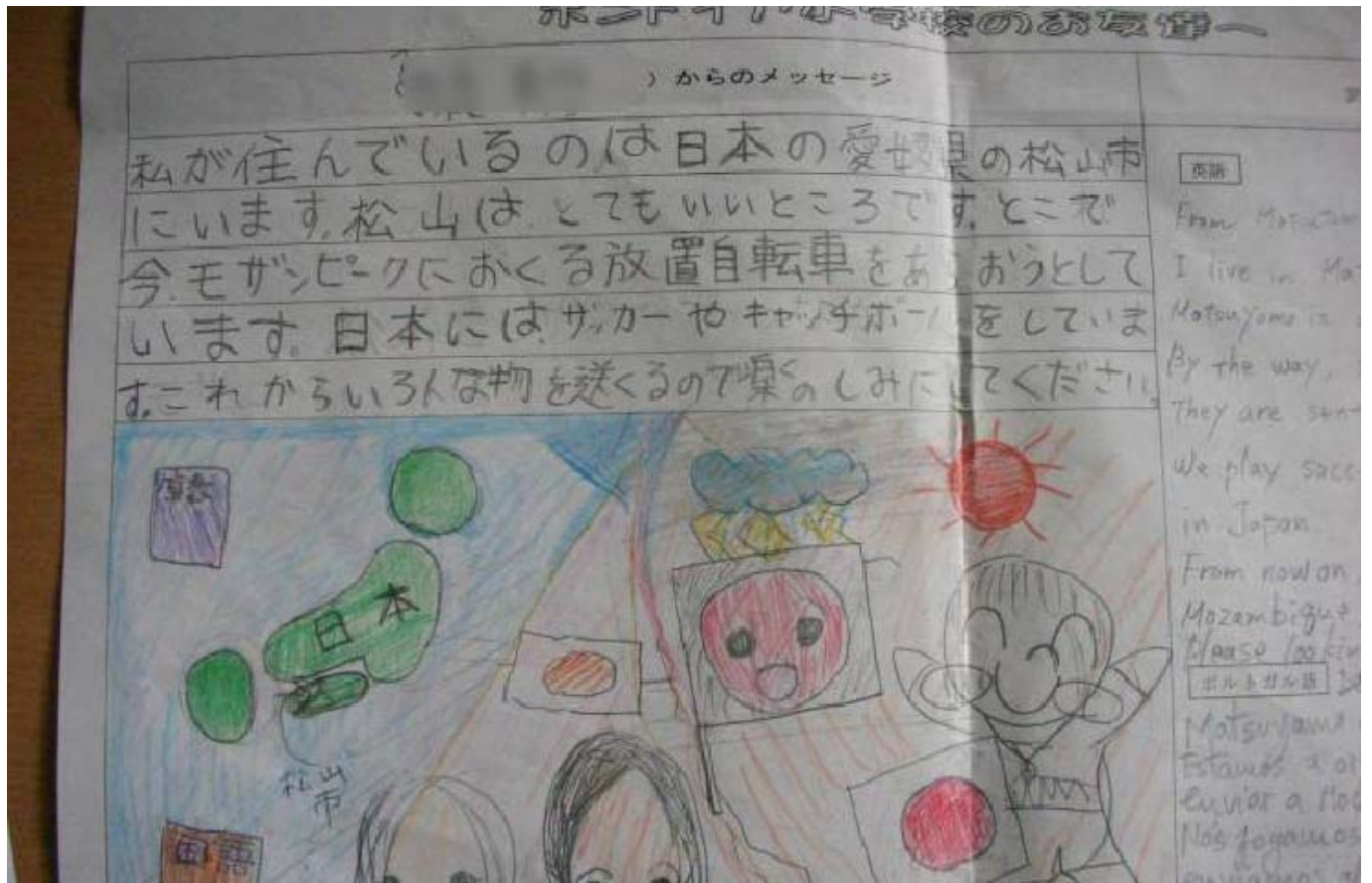
4 これからに向けて

これまで挙げた事例以外にも、多くの実践を積み上げ、毎年ブラッシュアップしながらモザンビーク共和国との交流を続けている。これまでの課題であった受け身の国際理解学習、途上国への支援が主体的・能動的に変わっていることはおわかりいただけたと思う。これまでの積み重ねを象徴するのが、地域の方の反応である。子どもたちが校区に出かけ、モザンビークの現状を伝え、支援を求めると快く、多大な協力を得ることができる。新玉小＝モザンビークという認識が子どもたちだけではなく、地域の方にも認知されているのである。この耕された土壌からは、真の国際感覚を身に付けた子どもたちが育っていくものと考えている。

「？」から「！」へ。「モザンビーク？」から「モザンビーク！」へ。本校の学校文化として根付きつつあるこの学習をさらに確固とした取組にしていきたいと考えている。未来を担う子どもたちのために。



(児童がモザンビークを紹介するために創った絵本の一部)



(モザンビークに送った手紙・地域イベントでの児童の取組発表の様子)

総合的な学習の時間指導案

1. 単元名 平和な世界を築くために私たちにできること
2. 目標
- ・モザンビーク共和国との交流や支援を通して、世界の現状を理解し、自分たちにできることを実践する。
 - ・モザンビーク共和国との交流から、自分たちの生活や生き方を見つめ直し、より良い生き方、世界の在り方について考える。

3. 本時の学習

- (1) 場所 多目的室、各教室
- (2) 学年・組 6学年1組 38名、2組 39名 計77名
- (3) 小単元名 「持ち帰った自転車をみて考えよう」(第16・17時/70時)
- (4) 本時の目標
- 持ち帰った5台の自転車を見ながら、放置自転車の課題解決の方向性を考える。
 - 一つの解決の方法として、モザンビークへ送る自転車を清そうしたり、メッセージを書いたりすることを計画することで、相互交流に関心を持つ。
- (5) 本時で育てたい力(本校の総合的な学習のねらいに即して)
- B 自ら学ぶ力 計画力 C コミュニケーション能力 D 思考力
- (6) 準備物 <児童>筆記用具、総合ファイル <教員>放置自転車5台
- (7) 本時の流れ(5時間目・多目的室)

段階(分)	学習活動と児童の意識(発問内容も含む。)	指導上の留意点
広げる (15分)	<p>1. 保管場所見学の感想を交流する。</p> <p>「たくさんの自転車が取りに来られないままで処分されるなんて、ひどいな。」</p> <p>「まだ十分使えるものもたくさんあったよ。」</p> <p>「モザンビークに送る自転車は、ボロボロだったよ。これでよろこんでくれるのかな。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ はじめに5分程度、自由に自転車を細かく見せ、考えさせる。 ○ ワークシート⑧に書いたことを読ませるなど、多様な意見が出るように指名する。 ○ 自分たちの意識を変えることとモザンビークに送る自転車のことの両面が出るようにする。
深める (15分)	<p>2. (5台)の放置自転車に対して、自分たちが関われることを考え発表しあう。</p> <p>「ほこりを取ることはできるよ。」「さびも磨けば取れるかも。」「わたしたちからのメッセージを付けよう。」「壊れたチェーンやブレーキは直せないよ。どうしよう。」</p> <p><予想される意見></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 清掃する。 ・ 磨く。 ・ 色をぬる。 ・ メッセージを付ける。 ・ 100台(もしくはグループ1台)自分たちで清掃する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ <u>課題解決に関わる一つの方法として、竹内さんの支援活動を手伝うことが入ることを再確認する。</u>(放置自転車の根本的な解決にはならないことは前提の上で指導する。) ○ 7月12日(日)に積みこみ作業があることを伝え、できることを考えさせる。(竹内さんや横田さんが現地で受けわたしてくれることを伝える。)
計画を立てる	<p>3. <u>相手にさらに喜んでもらうための送り方を話し合い、計画を立てる。</u>(クラスで取り組むことを決める。)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 6時間目の活動として、<u>小学生に対しての手紙を書くこと、</u>

<p>(15分)</p>	<p><予想される意見></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 手紙を書く。 ・ビデオメッセージを付ける。 ・ 心をこめて磨く。 ・何か他に支えん物資を付ける。 	<p>ビデオメッセージの内容をクラスごとに考えることを伝える。</p> <p>○ 修理が必要な部分は、工業高校へ持っていくことを伝える。</p>
<p>評価：前時の見学をふまえて、自分たちに関われることを積極的に考え、意見を交換することができているか。(観察、意見、話し合い)</p>		

8. 本時の流れⅡ (6時間目・各教室)

段階(分)	学習活動と児童の意識 (発問内容も含む。)	指導上の留意点
<p>深める つなげる (20分)</p>	<p>1. 次週、次々週計画を話し合う。クラスで取り組むことを決める。</p> <p><次週、次々週に取り組ませたいこと></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自転車の清掃 ・ 色ぬり、ピースメッセージ書き ・ ビデオレター、手紙の完成 ・ その他 <p>(工業高校に修理をお願いしに行く活動や、さらに自転車を増やして清掃をする活動も視野に入れて)</p>	<p>○ どのような状態で自転車の積みこみを行うのか、もう少し自転車を増やすことはできるのか、工業高校との交流はできるのかを聞いておく。</p> <p>○ 2週間でできるようなものを考えさせる。</p>
<p>広げる (15分)</p>	<p>2. 放置自転車を送る現地の様子を詳しく知り、交流を深めるために、現地の小学生に向けて手紙を書く。</p> <p>「ぼくたちが自転車をきれいにしたことを伝えよう。」 「向こうの生活の様子を知りたいな。」 「わたしたちの日本のことも伝えよう。」</p>	<p>○ 用紙を渡し、書くポイントを指導する。(細かいことを伝えすぎない、聞きすぎない。交流のきっかけを作る手紙であること、相手のこと)</p> <p>○ 日本語で書いたものは、後で英訳→葡萄牙語訳され、現地に届けられることを伝え、<u>ていねいに考えて書く</u>ことを伝える。</p>
<p>見通しをもつ (10分)</p>	<p>3. 本時の振り返りと次時への準備等確認する。</p> <p>「心をこめて、現地の人に喜んでもらえるようにきれいにするぞ。」 「メッセージの返事が待ちどうしいな。」 「松山の<u>放置自転車の有効利用</u>に一役買っているね。」</p>	<p>○ 次時までには準備が必要なものがあれば、確認しておく。</p>
<p>評価：学習の目的や見通しを理解し、活動の計画の話し合いや交流のための手紙書きに意欲的に行おうとしているか。(観察、意見、手紙)</p>		

5. 活動計画 (全体構想)

テーマ 平和な世界を築くために わたしたちができること
～モザンビークから世界を見つめ直そう～

全体構想 (55時間)

時期	過程	児童の意識と学習の流れ	時数	育てたい力	備考・関連など
4月	出会い	<p>原爆って何?</p> <p>読み物資料『鶴が飛ぶ日』 広島・長崎 ビデオ『はだしのゲン』 『飛べ!千羽鶴』 原爆に関する読み物</p> <p>禎子さんはもっと生きたかっただろうな。 なぜ原爆を落としたんだろう。 原爆はなんてひどい兵器なんだろう</p>	10	<p>A 向上心 B 自ら学ぶ力 C コミュニケーション力 D 思考力</p>	
5月	見つける	<p>原爆の子の像の前で、私たちの平和への願いを伝えよう。</p> <p>平和祈念セレモニー</p> <p>私たちの声は、禎子さんに届いたかな。 原爆の被害は想像以上だったね。 今でもまだ苦しんでいる人がいるなんて。 世界中には、核兵器をもつ国や戦争をしている国があるよ。どうしてだろう。 あの原爆が落とされた戦争ってどうだったんだろう。</p>		<p>C 二度と繰り返さないという気持ちを言葉や歌に込めて取り組む。</p>	<p>修学旅行 広島平和記念公園 平和祈念資料館の見学</p>
6・7月	① 究める	<p>モザンビーク共和国の現状を知り、わたしたちにできることを考えよう。</p> <p>ハンガーバンケット モザンビークへメッセージを送る 平和を表現してみよう</p> <p>世界中にはまだ戦争が続いている国があるんだね。 僕たちは贅沢だな。大切にしないといけないな。 学校にも行けず、銃を持って戦わされたり、働かされたり 日本とずいぶん違うなあ。 モザンビークのために何かできることはないかな。 生まれてくる国によってこんなに格差があつては平和とはいえないよ。</p>	10	<p>D 世界の現状を知り、自分たちとの関係を考え、できそうなことに取り組む。</p>	<p>平和の語り部学習 NPO法人えひめグローバルネットワーク 竹内よし子氏 肥田浩一氏</p>
9・10月	② 究める	<p>モザンビーク共和国との交流を深め、共生について考えよう。</p> <p>テレビ会議 モザンビークとの交流会 アフリカキャラバン</p> <p>私たちの送ったメッセージが届いてる モザンビークの子どもたちはどんな生活をしているのか直接聞いてみよう。 お互いのことを知ること、仲良くなるのが平和につながるんだね。 モザンビークの人たちに送るために、募金活動をしたり、文房具を集めたりしよう。 これまで学習したことを、みんなに知らせたいな。</p>	10	<p>C 積極的に交流し、知りたいことを聞いたり、伝えたいことを分かりやすく表現したりする。 B モザンビークや開発途上国の現状から、平和な世の中について関心をもって調べたり、考えたりする。</p>	<p>NPO法人えひめグローバルネットワーク 竹内よし子氏 肥田浩一氏 モザンビーク駐日大使 ダニエル・アントニオ氏</p>

<p>11 ・ 12 月</p>	<p>究 ・ め る ③</p>	<p>中間発表会・募金活動・物資支援活動</p> <p>モザンビークの環境から世界の平和を考えよう</p> <p>エコバック作り・マイ箸作り・ソーラークッカー</p> <p>モザンビークの水問題は、世界中の環境問題が影響しているんだね。</p> <p>松山も水不足が問題になっていたよ。何か関係があるのか</p> <p>戦争が無くて、生活が苦しくて生きられなかったら、平和とは言えないんだね。</p> <p>身近なところから、物を大切に使い、環境を考えた生活を心がけることが大切なんだね。</p>	<p>10</p>	<p>A 環境を通して世界の平和にするために、身近なところから改善しようとする。</p>	<p>環境マイスター 藤本 豊實氏 NPO法人えひめグローバルネットワーク 竹内よし子氏</p>
<p>1 ・ 2 月</p>	<p>広 ・ げ る</p>	<p>松山の姉妹都市交流について考えよう</p> <p>姉妹都市フェア・国際交流について・姉妹都市について</p> <p>僕らの町の通りにあるサクラメントやフライブルグは姉妹都市の名前なんだね。</p> <p>今まで学習してきたモザンビークとはずいぶん違うなあ。</p> <p>世界にはいろんな状況の国があることを知って、仲良くなっていくことが大切なんだ</p> <p>これからの世界を平和にしていくためには、私たちができることを行っていくことが大切だと思うよ。</p>	<p>10</p>	<p>D 先進国と開発途上国の両方に目を向け、異文化理解しようとする。</p> <p>D 国際交流のあり方やこれからの自分たちの生き方について考える。</p>	<p>NPO法人えひめグローバルネットワーク 竹内よし子氏 愛媛大学大学生 松山市職員</p>
<p>3 月</p>	<p>伝 ・ え る ・ ま と め る</p>	<p>学習してきたことを伝えよう</p> <p>交流会・6年生を送る会</p> <p>新玉小学校のみんなや地域の人たちにもできることがあることを知ってほしいな。</p> <p>歌やメッセージで伝えよう。</p> <p>中学校になっても、できることを続けていこうよ。</p> <p>僕は環境問題についてもっと調べるよ。</p> <p>英語をしっかり勉強して、将来は世界の平和のために働こうぞ。</p> <p>募金活動・物資提供活動</p>	<p>5</p>	<p>C 伝えたいことを相手に分かりやすく表現する。</p> <p>B 続けて取り組めることを見つけて、できることを実践しようとする。</p> <p>A 周りや相手のことを考えながらよりよく生活しようと思掛ける。</p>	<p>NPO法人えひめグローバルネットワーク 竹内よし子氏 愛媛大学大学生 ニコラウ氏</p>